

## 英語の二重目的語構文および前置詞与格構文について： ミニマリストアプローチ

大塚，知昇  
九州大学人文科学府

<https://doi.org/10.15017/24666>

---

出版情報：九大英文学．54，pp.135-156，2012-03-31．九州大学大学院英語学・英文学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 英語の二重目的語構文および前置詞与格構文について

## ミニマリストアプローチ

大塚 知昇

### 1. 序論

#### 1.1 導入

英語の三つの項をとる構文の中には、(1a)のように、Goal の要素と Theme の要素が裸の状態連続するものと、(1b)のように Goal 要素が PP としてあらわれるものが存在する。以下では前者を二重目的語構文(DOC)、後者を前置詞与格構文(DC)と言及する。

(1) a. I gave him a book.

b. I gave a book to him.

これらの構文は、これまでの生成文法において多くの研究者の興味をひきつけてきた。これは、ひとつの言語がほぼ同一の意味役割関係を持つ構文を同時に二つ保持していることが特異であるためであると思われる。(2)に見られるように、両構文を Goal 要素が PP を伴って現れるか否かという観点のもとに定義するなら、フランス語は DC のみ、ドイツ語は DOC のみを有するということになる。

(2) a. Jean a donné un livre à Marie. (French)

Jean gave a book to Mary

‘Jean gave a book to Mary’

(Amano (1998:5))

b. Das Mädchen schenkte dem  
the(NOM) girl gave the(DAT) boy  
Jungen ein Buch. (German)  
a book

‘The girl gave the boy a book.’ (Amano (1998:359))

本論文では、これらの両構文に見られる4つの興味深い現象、すなわち、非対称的 c 統御関係、A バー移動に対する振る舞い、A 移動に対する振る舞い、そしてスコープ解釈に関する振る舞いに関する、両構文の非対称性を取り上げ、最新のミニマリストプログラムにおける、Chomsky (2008)の枠組で新たな分析を提案し、これらの現象をうまく説明できることを示す。

## 1.2 問題提起

第一に取り上げるのは、Barss & Lasnik (1986)により指摘された、非対称的 c 統御関係である。

- (3) a I showed Mary herself (in the mirror).  
b \*I showed herself Mary (in the mirror).  
(4) a I gave every worker<sub>i</sub> his<sub>i</sub> paycheck.  
b \*I gave its<sub>i</sub> owner every paycheck<sub>i</sub>.  
(5) a I showed each man the other’s socks.  
b \*I showed the other’s friend each man.  
(6) a I showed no one anything.  
b \*I showed anyone nothing.

(Barss & Lasnik (1986:347-50))

生成文法において、(3)-(6)に見られる照応形、束縛代名詞、each other、NPI の例を説明するには、DOC において、先行する間接目的語(IO)が後続の直接目的語(DO)を非対称的に c 統御することが一般的に求められる。

一方、DC では同様の例において、先行する目的語(DO)が、後続の PP 内にある目的語(IO)を非対称的に c 統御せねばならない((7)-(10))。

- (7) a. I showed Mary to herself (in the mirror).  
b. \*I showed herself to Mary (in the mirror).
- (8) a. I gave every paycheck<sub>i</sub> to its<sub>i</sub> owner.  
b. ??I gave his<sub>i</sub> paycheck to every worker<sub>i</sub>.
- (9) a. I sent each boy to the other's parents.  
b. \*I sent the other's check to each boy.
- (10) a. I sent no presents to any of the children.  
b. \*I sent any of the packages to none of the children.

(Larson (1988:338))

第二に、両構文の A バー移動に対する振る舞いの非対称性を見る。以下はそれぞれ Wh 疑問、関係詞化、分裂文、Tough 構文の例である。一般的に(11a)-(15a)では DOC において IO が A バー移動すると考えられており、非文法的である。一方(11b)-(15b)では A バー移動している要素が DO になっており、これらは文法的である。

- (11) a. \*Who did you give *t* a book? (Wh question)  
b. What did you give John *t*.
- (12) a. \*This is the person who he gave *t* that book. (Relativization)  
b. This is the book which he gave the person *t*.
- (13) a. \*It is John that he gave *t* that book. (Cleft construction)  
b. It is that book that he gave John *t*.
- (14) a. \*John is impossible to give *t* that book. (Tough construction)  
b. That book is impossible to give John *t*.
- (15) a. \*John, he gave *t* that book. (Topicalization)  
b. That book, he gave John *t*.

(Oba (2005:61))

ただし、これらの(11a)-(15a)を容認する話者も存在するため、何がその文法性を分けているのかについても考察を行いたい。

また、DOC では、A バー移動による目的語からの抜き出しに関しても、IO と DO で容認性がわかる。(16a)では IO から抜き出しがなされていて非文法的である一方、(16b)では DO から抜き出しがなされ、文法的となっている。

- (16) a. \*Who did you say John sent a friend of *t* a book?  
 b. Who did you say John sent me a picture of *t* ?

(Runner (2001: 40))

一方、DC では、対応する全ての例が文法的として扱われる<sup>1</sup>。

- (17) a. What did you give *t* to John?  
 b. Who did you give a book to *t*?  
 c. To whom did you give a book *t*?  
 (18) a. This is the book which he gave *t* to the person.  
 b. This is the person who he gave that book to.  
 c. This is the person to whom he gave that book *t*.  
 (19) a. It is that book that he gave *t* to John.  
 b. It is John that he gave that book to *t*.  
 c. It is to John that he gave that book *t*.  
 (20) a. That book is impossible to give *t* to John.  
 b. John is impossible to give that book to *t*.  
 (21) a. That book, he gave *t* to John.  
 b. John, he gave that book to *t*.  
 c. To John, he gave that book *t*.

さらに、DC における目的語内からの A バー抜き出しも、全て容認される。

- (22) a. Who did you give statues of *t* to all the season-ticket holders?

(Postal(1974:195))

- b. ?Who did you give the book to a friend of *t*?

第三に、A 移動に関しても、やはり両構文に非対称性が見られる。

- (23) a. Tom was given the book.

- b.\*The book was given Tom.

DOC では(23)のように IO は受動化が可能である一方、DO は受動化が一般的には不可能である。ただし、(23b)は IO が代名詞の場合には、容認度が上がることが指摘されている上に、DO の受動化自体を容認してしまう話者も存在する。この事についても説明を試みる。

- (24) ?The book was given him.

また、DC の A 移動に関しては、以下(25)に見られるように、DO の受動化が可能で、IO の受動化は不可能である。

(25) a. The book was given to Tom.

b. \*Tom was given the book to.

最後に見るのは、両構文のスコープ解釈の差異である。

(26) a. I gave every child a different candy bar. (every > a)

b. I gave a different child every candy bar. (\*every > a)

(27) a. I gave every candy bar to a different child. (every > a)

b. I gave a different candy bar to every child. (every > a)

(Bruening(2010a:292-293))

(26)は DOC の例であり、ここでは(26b)で、逆転スコープである ever が a より広い解釈、すなわち「candy bar の個数に対応する人数の子供たちが存在する」という読みが容認されない。一方、DC の例である(27)では、(27b)のように、逆転スコープである「すべての子供たちに対しそれぞれ異なった種類の candy bar が与えられた」解釈が可能である。

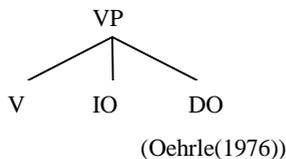
## 2. 先行研究の考察

以上の問題に対し、三つの先行研究を概観する。なお以下において、説明の簡略化のために、DOC の Goal 要素を間接目的語(IO)、Theme 要素を直接目的語(DO)として言及し、それに並行的に DC の Theme 要素を DO、そして PP 内に存在する Goal 要素を IO と呼ぶ。

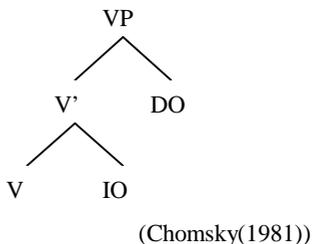
### 2.1 Larson(1988)

DOC に関して、生成文法初期の頃は(28)のような三又構造が想定され、その後、二又構造が基本的な構造の概念となつてからは(29)のように、IO と DO が連続的に併合している構造が想定された。

(28)

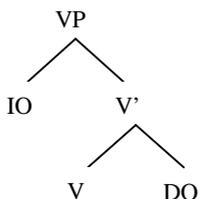


(29)



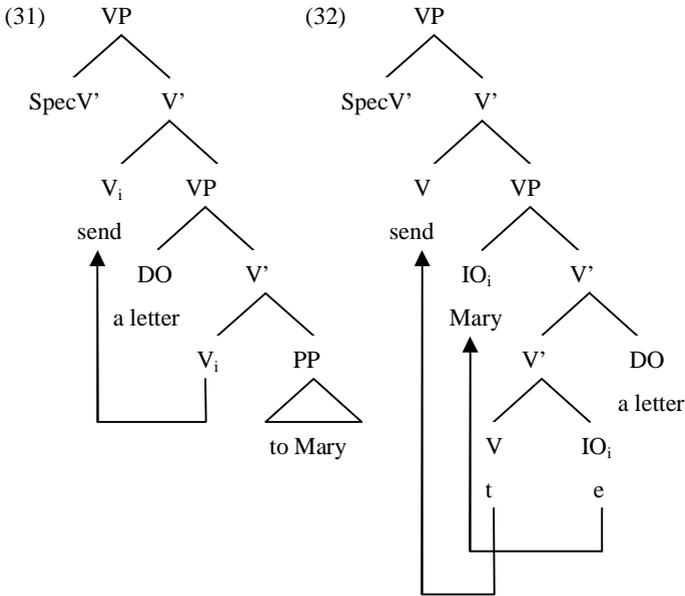
しかしながらこれらの構造では、1.2でみた IO が DO を非対称的に c 統御するという関係が得られない。一方で、(30)のような構造を想定するなら両目的語間の非対称的な c 統御関係は得られるが、表層の語順が「IO V DO」となり、正しい語順が保持されない。

(30)



この非対称的 c 統御関係の問題は DC においても問題となる。やはり DC においても上記の構造を適用すると正しい関係が予測されない。

Larson(1988)は、DOC が DC の構造から派生するという与格交替の立場のもと、動詞繰り上げを導入することにより、両構文における非対称的 c 統御関係を説明した。空の主要部からなる動詞の層の導入により、Larson(1988)以前では困難であった c 統御関係が、構造上で反映されている。(31)は、DC の構造を、(32)は DOC の構造を表している。



また Larson (1988)では、格付与に基づいて、DOCのA移動の非対称性を説明している。DOCではDOは常に元位置で格を受ける一方、IOは受けられないため必ず移動せねばならず、したがって受動化でもIOが移動せねばならない。IOではなくDOが受動化により移動すると、IOの格は与えられないままになってしまう<sup>2</sup>。

さらに、重名詞句移動を、NP移動ではなく、動詞繰り上げにto PPが随伴されて繰り上がっている例であると分析し、DOCの重名詞句移動の容認性に関する非対称性を説明している。彼は、与えるべき意味役割を与え切れていないV'は、Vとして再分析されると想定している。(31)において、PPを支配している下位のV'は、まだDOにあたえるべき意味役割を与え終えておらず、したがってそのV'はVとして再分析されることができ、動詞繰り上げの際にPPをつれて移動することができる。一方で(32)ではDOを支配するV'がすでに意味役割をすべて与え終えており、したがって再分析されえず、移動の対称にならない。よって、DOCの重名詞句移動は容認されない。

ただし、Larson (1988)の分析はいくつかの理論的問題を抱えている上に、

重名詞句移動を他の A バー移動と区別して分析していることから、その他の A バー移動に関する問題や、スコープに関する問題を説明できていない。

## 2. 2 Oba(2005)

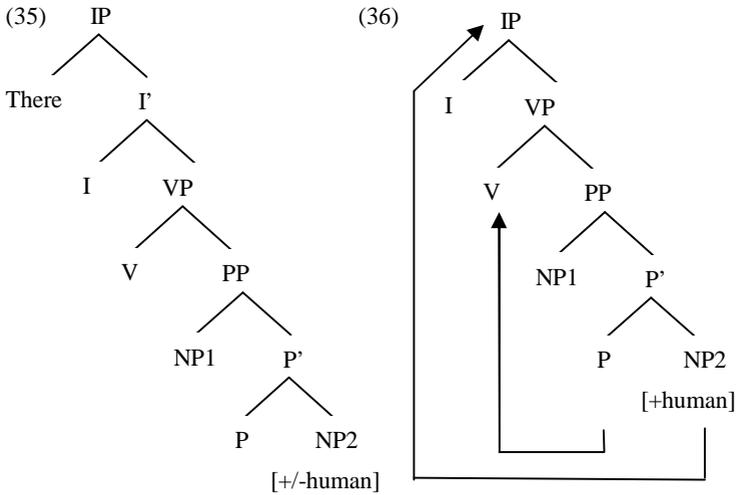
続いて、Oba(2005)の分析を見る。Oba (2005)も Larson(1988)同様、DC から DOC が派生すると言う立場をとっている。

これまでの先行研究で、DOC の IO は[+human]の要素しかとることができないという事実が指摘されてきたが、Oba(2005)は Freeze(1992)が提案した 'Have' predicate を DOC の構造に導入することで、(33)、(34)に見られる DOC に特有の所有の解釈を説明している。

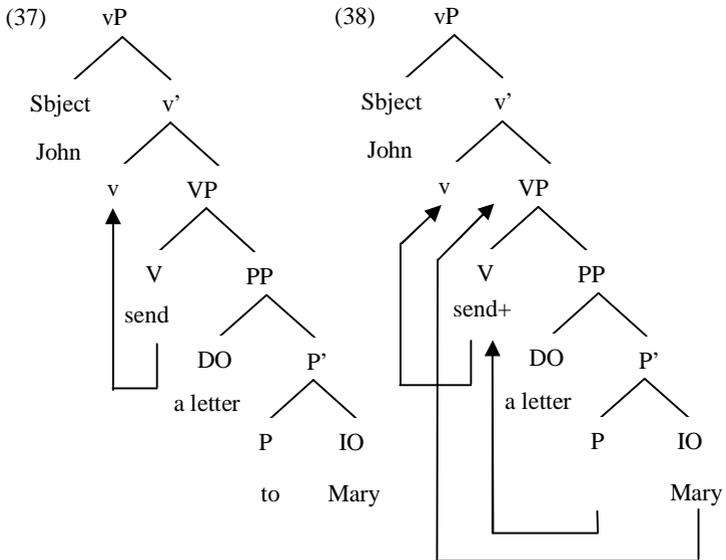
- (33) a. John sent Mary a telegram.  
b. \*John sent France a telegram.

- (34) a. Bill threw John a ball.  
b. \*Bill threw first base a ball.

Freeze(1992)は、*there* 構文と 'Have' predicate は同じ基底構造から派生すると分析している。P が音声的にあられる場合には *there* 構文が派生し、この場合構造内の NP は[+human]であっても[-human]であってもよい((35))。一方で構造内の NP が[+human]であり、P が *there* である場合、P が V に編入され、EPP の要請により NP が主語位置に上がり、'Have' predicate が生成されると分析している((36))。



この分析を DOC に適用し、Oba(2005)は以下のそれぞれ(37)、(38)のように DC と DOC の構造を想定した<sup>3</sup>。



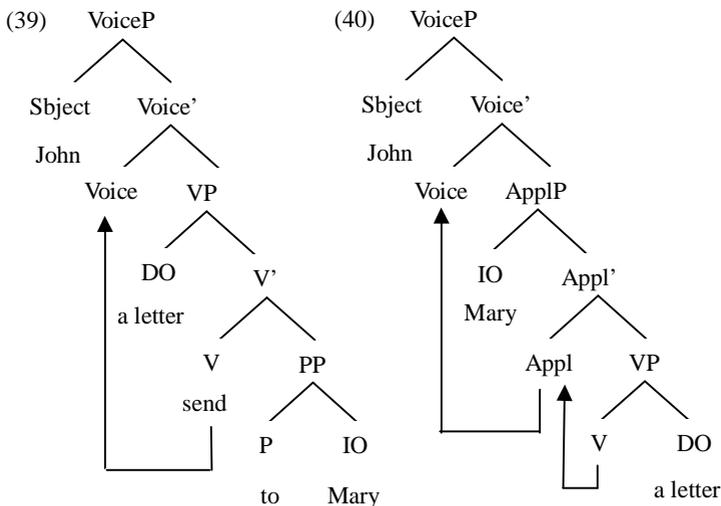
両構造において、非対称的 c 統御関係は保持されている。また、上記(36)で見た 'Have predicate' の P の編入の導入により、所有の解釈が説明される。

さらに Oba(2005)は、(38)の IO の移動が Themization/Extraction (Th/Ex)と呼ばれる Chomsky (2001)で提案された音声操作の一種であると分析している。この操作は英語に特殊な音声的操作であり、その適用対象となる NP には移動のような統語操作がかけられないということから、DOC の IO が A バー移動できないと説明している。

しかし、Oba (2005)では A 移動に関する説明、スコープに関する説明ができていない。さらに Th/Ex の本質自体も定かではない上、それが音声的操作であるなら LF ではその移動は見え、したがって(38)の非対称的 c 統御関係が LF では得られないという問題も抱えている。

### 2.3 Bruening(2010a, b)

最後に、Bruening (2010a, b)を見る。彼は、DOC と DC を別々の構造から派生させ、DOC には Baker (1988)や Marantz (1993)により提案された Appl(icative) 主要部を構造に導入している。(39)が DC、(40)が DOC の構造である。



また Bruening(2010a)で特筆すべきこととして、彼は R-dative shift と呼ばれる操作を提案している。これは A バー移動が DOC の IO に適用される際に、必ずそれに先立ち IO が ApplP 指定部の右方へ移動し、その際、音声的に to

が出現するというものである。この R-dative shift により、DOC の IO の A バー移動は、DC の IO の A バー移動と形式上同じものになり、結果的に DOC の IO の A バー移動は観察されないということになる。

さらに、スコープの問題については、(39)では DO と IO(を含む PP)が同一の最大投射である VP 内にあるが、(40)ではそうでないことから、m 統御に基づく優位性条件によって説明している。DOC の DO は IO に非対称的に m 統御されており、IO を超えてスコープ解釈に関する移動をすることができないが、DC の DO と PP の間には非対称的な関係がなく、したがってどちらもスコープ解釈に関する移動の対象となりうる<sup>4</sup>。

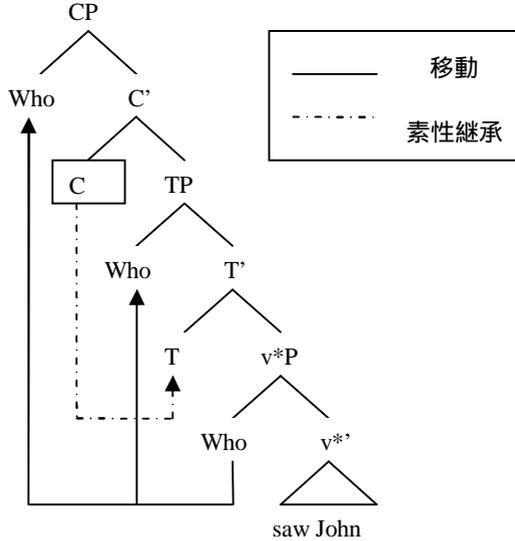
しかし、Bruening (2010a, b)は、R-dative shift という操作自体に、理論的問題を抱えている。この操作は DOC の IO の A バー移動を防ぐためだけに導入され、したがってアドホックであることを否めない。

### 3. 提案

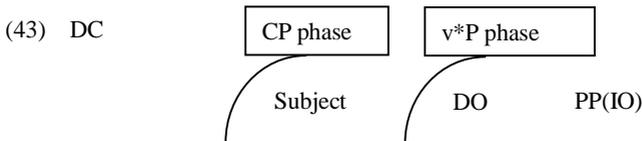
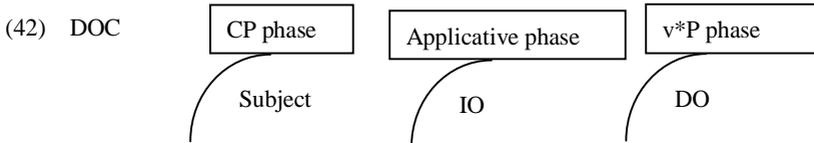
以上の先行研究を踏まえ、本章では、これらの研究を Chomsky (2008)の枠組で捉えなおし、説明ができていない問題の解決を試みる。

Chomsky (2008)では、Parallel Move と素性継承という理論が導入されている。文はフェーズに基づいて循環的に構築され、それぞれのフェーズ単位で多重に transfer/spell-out がなされる。さらにそれぞれのフェーズはフェーズ主要部にある素性により操作を駆動され、フェーズ主要部と、その素性を継承する非フェーズ主要部により、並行的に移動操作が駆動される。フェーズ主要部は端素性に基づき操作を行い、非フェーズ主要部は素性に基づいて操作を行う。例として”Who saw John?”のような文は(39)のような具体的な派生をたどる。

(41)



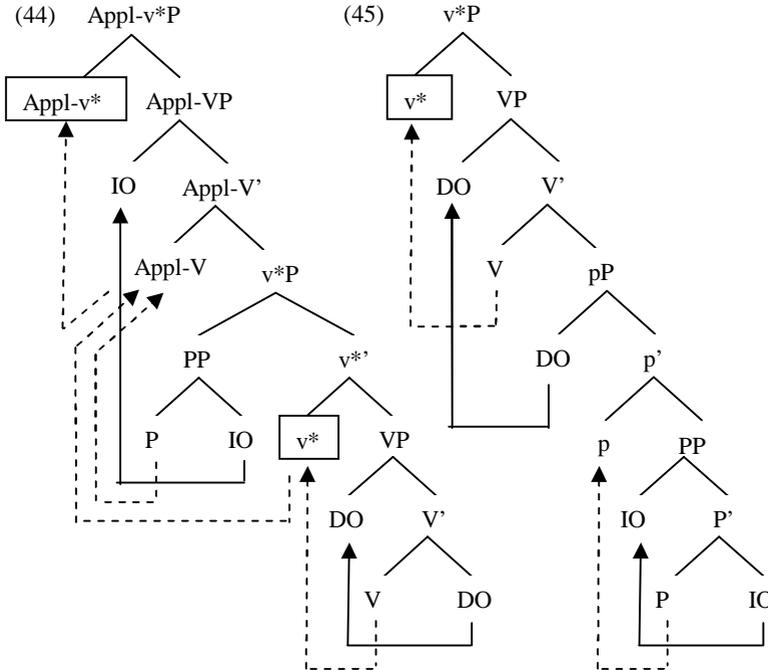
以上の枠組で DOC と DC をとらえなおす上で、まずは何がフェーズ主要部であるかを定義せねばならない。ここでは、DOC が三つの命題を持つとされていること、そして、Richards (2010)によると一つのフェーズ内に範疇が同じ要素が二つ生じられないとされるが、DOC は三つの NP を持っているということから、DOC には、CP、v\*P に加えて、Appl を主要部とする三層のフェーズが存在すると想定する((42))。一方 DC では命題は一般に二つであると言われ、さらに一方の IO が PP 内に存在し、裸の NP は DC 中には二つしかないことから、二層のフェーズを想定する(43)。



さらに、Richards (2007)の素性継承に関する理論に基づき、フェーズ主要部

はその補部に非フェーズ主要部を必要とすると想定し、Appl を Appl-v\* と Appl-V の二つに分ける。これらはそれぞれ v\*P における v\* と V に対応する。

以上の想定のもと、DOC と DC の構造はそれぞれ以下の(44)、(45)のようになる。



(44)、(45)では、まず四角で囲まれた要素がフェーズ主要部を、実線が句の移動を、破線が主要部移動をあらわしている。また本来であれば、どちらにおいても最上位の投射の指定部位置には主語である要素が投射しており、さらに上には TP と、フェーズである CP も投射するが、ここでは簡略化のため省略する。以下にそれぞれの派生をたどる。

(44)では V と DO が併合し、そこに v\* が併合して、指定部には IO を含む PP が併合する。v\*P レベルでフェーズとして操作が駆動され、DO は v\* から素性を継承している V と格の目的で Agree し、同時に VP 指定部へと移動する。続いて Appl-V、Appl-v\* が併合し Appl-v\*P レベルで再びフェーズを形成して操作が駆動される。Appl-v\*P では、Appl-v\* の素性を継承した Appl-V が、

v\*P 指定部にある PP 内の IO と Agree することで IO が抜き出され、Appl-VP 指定部位置へ移動する。また(44)では、主要部移動として V は v\*、Appl-V を通過し Appl-v\*へと繰り上がり、最終的にこの位置で発音される。この際、P は Appl-V 位置に V が移動した際に、V に編入される。

一方で(45)では、P と IO が併合、続いて機能範疇主要部である p が併合し pP が形成され、指定部には DO が併合する。ただし、この pP は弱フェーズであり、この時点では操作は駆動されない。続いて V、v\*が併合し、v\*P フェーズとして操作が駆動される。ここで本分析では、弱フェーズ主要部である p は一種の触媒のような働きをし、強フェーズ主要部である v\*に自身の素性をコピーするよう要求すると想定する。v\*は V に 素性を渡すが、同時に自身の素性をコピーし、これを p へと渡す。p はその素性をさらに P へと渡し、P が IO と Agree し、同時に IO は PP 指定部へ移動する。また同時に v\*の素性を継承する V と DO が Agree し、DO は VP 指定部へ移動する。(45)では、P が p へ、そして V が v\*へと主要部移動し、それぞれの位置で発音される。

以上の分析に関していくつか概念的考察を行う。まず(44)では、Chomsky (2008)においてフェーズ指定部にある外項からの要素の抜き出しが禁じられていることが問題になりうる。

- (46) a. \*Of which car did [the (driver, picture)] [t cause a scandal]?  
b. Of which car did [they find the (driver, picture)]?  
c. Of which car was [the (driver, picture) awarded a prize]?

(Chomsky (2008))

(46)に見られるように、Chomsky(2008)では、フェーズの指定部にある要素内からの抜き出しを禁じている。(46a)では v\*P フェーズの指定部から Wh 句が抜き出されていて、非文法的である。一方(46b,c)はフェーズからの抜き出しではなく、問題とはならないとされている。

しかし以下のような遊離数量詞の例を、QP 投射内からの主語 NP の抜き出しの一例として分析するならば、これは強フェーズである v\*P 指定部位置にある要素からの A 移動としての抜き出しであるが、文法的ということになる。本分析では、A 移動は同一 transfer/spell-out 領域内での移動であるが、A バー

移動は transfer/spell-out 領域の外であるフェーズエッジへの移動であることから、その容認性に何らかの差異が生じていると想定する。

(47) a. All the children have seen this movie.

b. The children have all seen this movie.

(Sportiche(1988:426))

したがって、(44)の抜き出しは A 移動であるため容認されると想定する。

続いて、(45)では弱フェーズ主要部の p を想定し、これが強フェーズ主要部に素性をコピーするように要求すると想定している。本分析では、(44)の DOC の構造の PP は、一切のフェーズを形成せず、その主要部の P は音的に不安定で、動詞に編入されることを好むと想定している。同時にこの P は格の値を定めることもできない。一方で(45)の p は弱フェーズ主要部として働く。ここで、Legate(2003)では弱フェーズ主要部が端素性を有する可能性が指摘されており、またフランス語では、受動態の動詞上に性と数の一致が観察されるため((48))、弱フェーズ主要部には 素性も存在していることになる。

(48) Les chaises ont ete repeintes.

the chairs.fem.pl have.pl. been repainted.fem.pl

‘The chairs were repainted.’

(Boeckx (2008:33))

しかしながら、弱フェーズが素性を持つことは一つの問題を生じさせる。本分析では、強フェーズ主要部を、Chomsky(2008)にならひ、自身で素性を持ち、それにより操作を駆動する要素と想定している。したがって、もし弱フェーズが自身で素性を持つなら、これも強フェーズと同様に操作が駆動し、Transfer/Spell-Out がなされてしまい、弱フェーズの補部も PIC により抜き出しが不可能と予測されてしまう。仮に、弱フェーズ主要部が素性を持っていても、強フェーズが出現するまで自身の操作を待つと想定すると、これらの現象を説明することはできるものの、この想定は概念的根拠付けができず、アドホックなものになる。一方弱フェーズ主要部は素性を持たないとすると、弱フェーズ内のこれらの素性に関する現象の説明ができない。そこで本分析では、強フェーズ主要部しか素性を持つことができないという前提に基づき、弱フェーズ上の端素性、素性は強フェーズのものがコピーされたもの

であると想定する。弱フェーズ主要部は、本質的には強フェーズ主要部のよう  
に働く能力を有しながら、自身の素性を持たないため、それ自体では操作  
を駆動できないものであると想定する。そして、弱フェーズ主要部は触媒の  
ように作用し、強フェーズ主要部に素性をコピーするように要求することで、  
それにより自身の操作を駆動すると想定する。

#### 4. 問題の考察

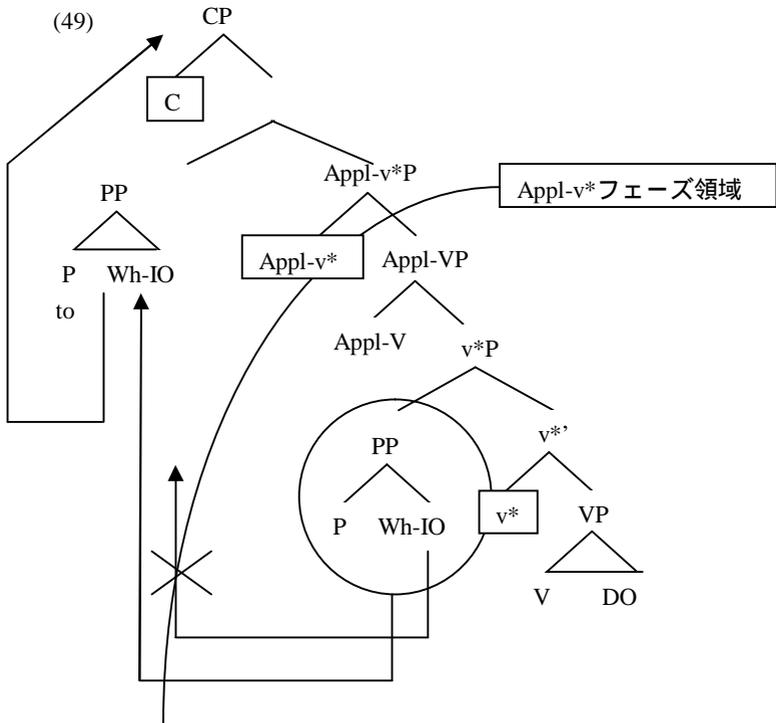
(44)、(45)の構造をもとに、1節の問題の説明を試みる。

##### 4.1 非対称的 c 統御関係

非対称的 c 統御関係については、(44)で IO が DO を、(45)で DO が IO を、  
移動後の位置にて非対称的に c 統御しており、構造上反映されている。

##### 4.2 A バー移動の非対称性

続いて A バー移動についてみていく。まず DOC では IO が PP 内にあり、  
この PP が  $v^*P$  の指定部にあることが重要となる。本分析では、フェーズの  
指定部にある外項からの A バー抜き出しを禁じているため、IO が A バー移  
動する際には PP から抜き出されることができず( )、PP 全体として前置さ  
れることとなる( )。この際、PP にある P は V へと編入され得ないことから、  
音声的に”to”として出現せねばならないと想定する( )。これにより、DOC  
の IO の A バー移動はかならず”to”をとめない、DC におけるそれと同じ形に  
なるため、結果的に DOC の IO の A バー移動は観察されないという  
Bruening(2010a)の指摘を、R-dative shift といった独自の操作を想定せずに説  
明することが可能である。



なお、DOC の DO と、DC の DO、IO については、妨げる要因が存在しないため、すべて通常通り A バー移動することができる。また、DOC の IO はフェーズの指定部にあることから、内部からの抜き出しも不可能である。一方で DC では、それらの移動を妨げる要素や想定が一切ないため、DO、IO ともに内部から抜き出しをすることも可能である。

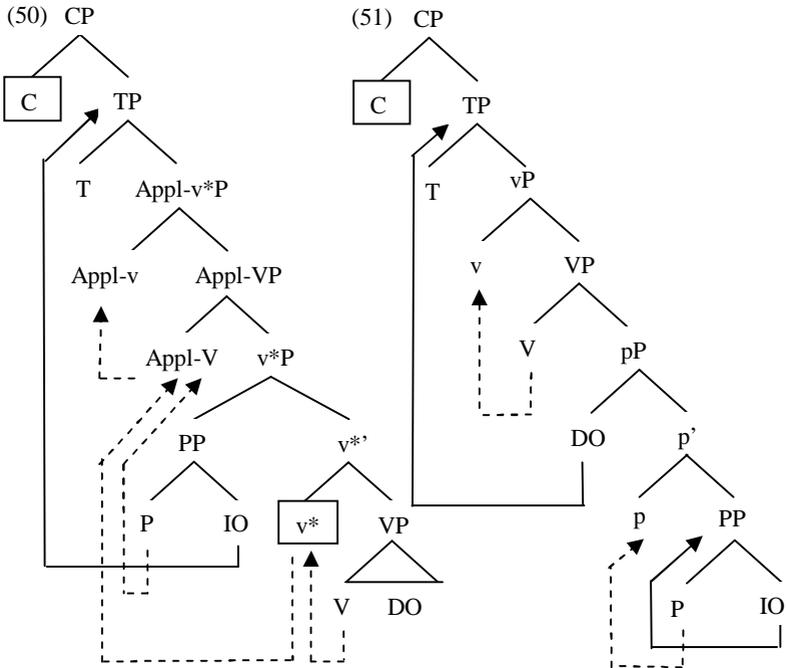
なお、DOC の IO の A バー抜き出しを容認する話者については、彼らの DOC 内に P が存在しないと想定する。よって音声的な”to”の出現は起こらないが、そのような話者にとっても依然として IO はフェーズ指定部にあることから、IO の内部からの抜き出しが不可能であるという事実は説明される。

### 4.3 A 移動の非対称性

次に、A 移動について見る。受動化に伴い、T にもっとも近いフェーズ主要部が強フェーズでなくなると想定し、それぞれの構文の A 移動を見ていく。

まず DOC では、Appl- $v^*$  が弱フェーズである Appl- $v$  となるが、 $v^*$  は依然として強フェーズ主要部であり続ける。したがって、DO の格の値は  $v^*$  内で定められるが、IO の格の値は CP フェーズのレベルで T により定められる。 $v^*$  は常に強フェーズ主要部であることから、DO は  $v^*P$  内で格の値が定まるため、受動化されることはない。

一方 DC では、受動化に伴い T に最も近いフェーズ主要部である  $v^*$  が弱フェーズ主要部  $v$  にかわりと想定する。したがって CP フェーズが形成された時点で操作が駆動される。C はその 素性を T に渡し、T は DO と Agree し、この格の値を定める。同時に、p はここでは  $v$  が強フェーズ主要部ではなくしているため、強フェーズ主要部である C に 素性のコピーを要求し、IO はその素性を継承する P により格の値を定められる。



なお、DOC の DO の受動化を容認する話者に関して、DOC では IO が PP の存在により、DO を非対称的に c 統御していないため、DO が IO を越えて移動できる可能性が残ることに注目したい。ここで、これらの話者は、受動化により v\*も弱フェーズ主要部になることを容認すると想定する。そしてさらに、これらの話者は IO がデフォルト格を持つことを容認すると想定する。以上の想定により、そのような話者にとっては v が弱フェーズになるため、DO は IO を越えて TP 指定部まで移動することができる。DO は主格を受け、IO はデフォルトの格としてあらわれ、結果的に DO を主語とする受動文が生じる。この際、格の屈折としては英語のデフォルト格は対格と同じ形であることから、IO は形式的には対格としてあらわれることになる。なお、ここでこのデフォルト格に関して、以下に繰り返す(23b)と(24)の容認度の対比を説明することも可能である。

(52) a.\*The book was given Tom.

b. ?The book was given him.

(52)は、一般的に DO が主語となる受動文は、IO が代名詞であると容認度が上がるということを示している。本分析では、(52)の IO はデフォルトの格を有していることになる。ここで、屈折が可視的である代名詞にはデフォルト格は容認されやすいと想定する。これにより、DO の A 移動を容認する話者の多くが(52b)を容認することになるが、これらの話者の中で、屈折が起らない一般名詞についてもデフォルト格をもつことを容認する話者のみが、(52a)も容認することになる。

一方、DC では移動前でも常に DO が IO を非対称的に c 統御するため、優位性に基づき、格の目的では IO が DO を越えて移動することができず、DC の IO の受動化は不可能である。

## 5. 結論

本分析では、Chomsky(2008)の理論的枠組みのもとで、DOC、DC に関する先行研究をとらえなおすことで、代表的な問題であった、非対称的 c 統御関係、A バー移動に関する非対称性、A 移動に関する非対称性、スコープ解釈に関する非対称性を、特殊な想定を行うことなく説明することができた。

## 注

<sup>1</sup>ただし一般に PP は主語にはなれないことから、(20)において、他の例の(c)にあたる例は存在しない。

<sup>2</sup>Larson(1988)では、名詞に与えられる格を、動詞が本質的に与えることができる内在格と、構造上の位置から与えられる構造格にわけている。これにより、一般的な他動詞の目的語には内在格と構造格の両方が同時に与えられることになる。DOC では、DO には内在格、IO には移動後に構造格がそれぞれ与えられると想定されている。DOC の受動文ではこの IO への構造格を動詞が与えることができなくなると分析されており、したがって IO は格の理由で TP 指定部位置へ移動することが要求される。

<sup>3</sup>ただし、Oba(2005)自体は DC の構造を明示的には示していない。ここでの

DCの構造はOba(2005)の分析から予測されるものである。

<sup>4</sup>なお、スコープ解釈に関してはPP単位で計算がなされると想定されている。

## References

- Amano, Masachiyo (1998) Eigo Nijumokutekigokobun no Togo Kozo ni Kansuru Seiseirironteki Kenkyu (A Generative Approach to the Syntactic Structure of Double Object Constructions in English), Eichosha, Tokyo.
- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Barss, Andrew and Howard Lasnik (1986) "A Note on Anaphora and Double Objects," *Linguistic Inquiry* 17, 347-354.
- Bruenning, Benjamin (2010a) "Double Object Constructions Disguised as Prepositional Datives," *Linguistic Inquiry* 41, 287-305
- Bruenning, Benjamin (2010b) "Ditransitive Asymmetries and a Theory of Idiom Formation," *Linguistic Inquiry* 41, 519-562
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Fundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Freidin et al, 133-166, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Oba, Yukio (2005) "The Double Object Construction and Thematization/Extraction," *English Linguistics* 22, 56-81.
- Pesetsky, David Michael (1995) *Zero Syntax: Experiences and Cascades* MIT Press, Cambridge, Massachusetts
- Postal (1974) *On Raising: One Rule of English Grammar and its Theoretical Implications*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Richards, Marc D. (2007) "On Feature Inheritance: An Argument from the Phase Impenetrability Condition," *Linguistic Inquiry* 38, 563-572
- Richards, Norvin (2010) *Uttering Trees* MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Roberts, Ian (2010) *Agreement and Head Movement*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Runner, Jeffrey T. (2001) "The Double Object Construction at the Interfaces,"

[http://www.ling.rochester.edu/people/runner/older\\_pubs.html](http://www.ling.rochester.edu/people/runner/older_pubs.html)

Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19, 425-449